

---

# 放課娛樂部

raki & 竜司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

放課娛樂部

### 【Zコード】

N7439P

### 【作者名】

rakii & 竜司

### 【あらすじ】

作者 : rakii

放課後つてイタズラ心をくすぐるよね

悪戯で徒らな変人女子高生 嵐山早奈美と、彼女に振り回される男子生徒 西山治樹の会話攻防劇。

私立英高校のとある教室で、ちょっと変わった放課後が始まろうとしている。

## (前書き)

小説を書く者として、軽い気持ちで書いた作品があつていいのかとも思いますし、ましてやそれを公開していいものかといつ気持ちもありますが、この拙作はまさにそんな小説です。

私は他の作品を書くときに、設定の難しさや構成の難解さに心折れそうになることが多いのですが、そんなときにボケてついつむだけのコメディを遊びで書いて気分転換しています。

そんなことが十数回続いてできたのがこの小説です。  
最初は公開しないつもりで書いたので、自由度が高すぎたりやりすぎた感がかなりあります。

はしゃぎすぎたというか、完全に読者を選ぶ小説です。

どうか、読んで頂ける方は、ハードルを下げて、いやハードルを埋めてご覧下さい。

噂によると、この小説はドラゴンボールを知らないと10パーセントしか楽しめないとなんとか……。

いつもの堅い作風を壊して書いていますw

「放課後つてイタズラ心をくすぐるよね」

「一人きりの放課後の教室。彼女は端正な横顔をこちらに見せながら、そんなことを言った。

クラス一可愛い女子と一人きりなんて、本来テンパつてしまふもどろになる場面だが、僕は目の前の女子にそういう異性間のドキドキ感的何かを感じられない。

何故なら、目の前の女子高生が、外見で性格を詐欺つてるからである。

「いや、詐欺つてないよ、あたし。心も外見も綺麗なのさ」

「心が綺麗な奴は自分の整つた外見に言及しねえよ。謙虚さの欠片もねーのな。……つていうか、地の文を読むんじゃねえ」

「え？ てかさ、どうでもよくない？」

畜生、この女、話を一瞬で無に帰しやがった。

とにかく、この女は名を嵐山早奈美あらしやまさみというのだが、超美少女なのに頭が残念な子なのだ。

そして、そんな変入クラスメートの唯一の友人が僕、西山治樹にしやまはるきである。

「それで早奈美、僕はなんで呼ばれたんだ？」

そう、僕は「コイツに呼び出されてここに来たのだ。どうせひくでもない用事だらう。

「ああ、何だつけ。……そいつ、イタズラ心の話だよ」

「何だ、さつきからイタズラ心がどうのって」

「放課後つて暇でしょう？ なんかイタズラしたくならない？」

「いや、別に。帰りやいいじゃんか」

「死ね」

「…………」

僕は今なんで呪いの言葉を吐かれたのだろう。

「ねえ、やついえばや、今日は服着てるんだね。いつもは素っ裸であたしに会いに来るじゃない」「

「待て！ 勝手に僕を変態キャラにするな！」

何てことを言いやがるんだこの女は！

もしかして、早奈美は僕を暇つぶしに巻き込みたいだけなんじゃないのか？

「お前、ホントに何で僕を呼んだんだ？ 特に用事がないなら帰らせてもらいたいんだが……」

「うーん……もう本題に入るん？ まだまだ尺はあるんだし、作者にはもう少しえイントロを書いてもらわないと？」

「なんの迷いもなくメタ発言をするんじゃないよ。いいから本題に入れや」

僕としては小説の完成云々よりも、早く帰宅してゲームでもやりたいところである。

「じゃ、治樹ツチ、数学の宿題を見せてもらおうかー。」「は？」

「本題よ本題。数学の宿題見一せて」

「Jのアマ、そのために僕を呼び止めたのか。

「…………はあ」

それくらい自分でやれや。

「さあ！ 昂く！ もつたこぶらなこで！ あたしに、数学の宿題の答を寄越しなさい！」

「断固拒否する…」

「照れるなって。どんなに拒否しても最後にはあたしに答を見せるんでしょ。シンデレなんだよね～、治樹ツチは」

「うつせえ。見せるか、ばーか。つうか、その治樹ツチって呼び方やめろ」

「ふうん……そんなこと言つていいんだ？」

……？

早奈美は顎を上げて見下すようにして僕を睨んでいる。

何だ、早奈美のこの自信は……？

まるで、早奈美が僕の弱みを握っているみたいじゃないか。

「それは、どういう意味だ？」

「はははー、気づかない？ バツ力ですね～。自分の、過失に気づかないなんてねー。……いやさ、治樹ツチ。今ビキベツドの下に隠すのは古いつしょ。あーあ、バレちゃったね！」

「なん……だと？」

バカな、何でコイツが、僕の隠したアレを知ってる？

「治樹ツチの隠したのは……」H

「待て待て待て待て！…」

「口」

「待てつて言つてんだろ！」

「エロ本」

「ギャアアアアアー！」

「終わつたあー……」。

よりによつてクラス一の美少女にバレるつて。心はブサイクとはいえ、一番可愛いコイツにバレるつて……。

「あれれ～？ まさか、ホントに隠してたんだ？ かあ～、バカ過ぎワロス。リアクションしなければ分からなかつたのに」  
ナニー！？

今なんつった？

え？ 何？ コイツ、僕をはめやがつたのか！？

「あのー、嵐山早奈美さん。私から一つ提案が御座います

「うん、だろうね」

「数学の宿題を見せますので、この度のことは一切口外しないと約束していただけないでしょうか？」

「治樹ツチ、そのノリ超キメエ」

「ナンだと？ 人が下手に出れば……。そしてやめろ、その呼び方！」

「じゃ、エロツチ」

「治樹ツチでお願いします……」「

クソッ。 「ツチ」の方を残しやがった。

早奈美は机に腰掛け、満足げに脚を組んだ。

「早く見せろ、治樹ツチ。それか、死ね」

「なんか時々、僕に死を要求するのは何なんだよー。」

「早く見せろ。そして死ね」

「選択じゃなくなつた！？」

なんてことだ。早く見せなこと」Jで死んでしまつ。

「分かってたよ」トトロは、なんとか無性に悔しいな

何がイヤで心たゞぎたれ 徒に心たゞお前の場合

西脇台封、二二二ノ完敗す。

1

「乙でーす。いやあ、助かつたよ、治樹ツチ。数学つて、苦手でさー早奈美は二コ一コと笑みをこぼしながら僕に宿題を返却した。  
……何だらう。敗北感を通り越して清々しい感じ。いやー、まあ、喜んでもらえれば結構ですよ。これでまた、僕はまた博愛を御披露目してしまったよ。そろそろ神様からスカウトがされるんじゃないかな。……え、何のスカウトかつて？

## 第一のキリストのはりつけね。

早奈美が冷淡な眼差しをこちらに向けながら、低い声で言った。  
空恐ろしいのは、二ノ二ノが健在なことだ。

……不思議だ、何でだろう、何故かこの女は地の文を読みやがる。

「磔はやめてくれ。僕は多分復活できるタイプの人間じゃない」「さつき、第一のキリストとか言つちやつたけれど。

「じゃあ、安息日に安息香酸ナトリウムカフェインを大量皮下注射で」

「よく分からんが痛そうだからやめる」

「コイツ、数学できないくせに理系知識出してきやがった。しかも、

さり気に安息日とかけてきてんのが腹立つ。

「ところで、用が済んだなら僕は帰るけど」

「はあ？　あー、なに、そんなに早くエロ本が見たいわけ？　これだから男は……」

「ふざけんな、僕は早く帰つてモンハンがやりてえだけだ」

「ふうん、いいよ、帰つても。ただ、あたしは独断と偏見でキミがただのエロッチだつて認識して、明日には全世界にその噂が発信されるけどね」

「なつ！　貴様、約束がちげえぞ！　しかも何で世界規模なんだよ。お前はどういうネットワークを持つてんだ。それに独断と偏見を発信すんな！」

「あたし約束とか知らなーい。互いに弱みを握らないと約束なんて意味ないよーん」

……うぜー。

何だい、この女。傍若無人過ぎる。

「早奈美、よーく考えてみひ。お前が僕を引き止める理由はあるのか？　用は済んだはずだ」

「治樹ッチにはあたしのやつている俱楽部活動に加わつてもらいます」

「…………一応聞いてやるから俱楽部名と活動内容を言つてみる」「どうせ訳の分からんことを言い出すのは分かり切つている。

「放課娛樂部。放課後の暇つぶしを主な目的とする、圧力団体」

「うん、分かった。人はそれを『帰宅部』と呼ぶんだよ、部長さん。

……いや！？　圧力団体って何ぞ！？」

「一見帰宅部だが帰宅部じゃなかつた！？」

「圧力をかけてメンバーを増やすんだよ。おめでとさん、治樹ツチが放課娯楽部の第一の部員だよ」

「そういうことかよ！ 省庁とか政党に圧力かけるのかと思つた。ただの嫌がらせ団体かよ！ しかも部員一人！？」

まあ、当然といえば当然ではあるけれど。既に組織化されたら、そつちの方が驚きだ。

「安心して、徐々に増やすから。とりあえず、治樹ツチを第一部長に任命します」

「第一部長つてなんだよ。なんで長が一人いやがる。初めて聞いたぜ、そんなシステム」

「馬鹿丸出しだな、治樹ツチは。古代スバルタでは国政において二人の王が並立してたんだよ」

「馬鹿はお前だ。スバルタと帰宅部を並べるな」

古代スバルタとか……。知識が偏つてるよな、コイツ。大体、確かに古代スバルタでは王が一人居たが、形式的な存在だったんじやなかつたか。しかも、代表が一人にしたつて複数にしたつて、代表が代表たる由縁はその他の一般があるからこそだろ。代表しかいない団体つてなんだよ。

「それで？ 僕がその部に入ると何か得が有んのかよ」

「あるよ。今なら入部者に、とつておきの情報をプレゼント！」

「何だよ、とつておきの情報つて」

「ドラゴンボールで一番強いキャラは誰かという永遠のテーマの答

「……いや、僕は別に知りたくねえよ」

大体、ドラゴンボールを知らない人は付いて来れないぜ。読者を選ぶ小説書いていいのかよ、作者め。

「大丈夫だよ。前書きにドラゴンボールを知らない人はこの小説を十パーセントしか楽しめませんって書くから」

「ドラゴンボールで九十パーセント楽しめんのかよ！ とんだ小説だな！」

また地の文を読みやがったことは見逃せても、そりだけは突っ込むぞ。僕は作品内容には妥協しないんだ。

「作者が十回もドラゴンボール全四十巻を読み込んで発覚した眞実なんだから聞いてやんなよ！ 治樹ツチの人でなし！」

「逆ギレかよ！ そこまで言わることか！？」

「作者はみんなにこの発見を伝えてるのに、コアなドラゴンボールファンが少なくて伝わらない。……その想いをこの小説に全て込めてるのよ」

「作者も作者だな、畜生。この作者、絶対止めてもやるだろ……。分かつたよ、聞いてやるから言つてみろよ。僕もそれなりにドラゴンボールには精通しているし」

なんか、こんな自由でいいのか？ 果たして読者は付いて来れるんだろうか？

「まあ、元々作者はこの小説を公開するつもりなかつたみたいだからね。西尾維新風に言つなら『一百パーセント趣味で書きました』って感じじゃない？」

「また『化物語』読んだ人にしか伝わらねーことを言いやがつて。しかも後書きを引用してつからな。……ていうかさ、そろそろ気になつてきたんだが、メタ発言が多くすぎて話がグダグダだぞ」

「そうね。そろそろ本題のドラゴンボールの話に移りましょー」

いつの間にか本題がドラゴンボールになつちましたよ……。

「本題がドラゴンボールだつたら今までの件何だつたんだよ、全く」「あのねえ、無駄も必要なんだつて。ドラゴンボールで言つとここのヤムチャよ。初期は孫悟空のライバルであり仲間であり、重要なポジションだと思われていたのに、後になつて読み返してみれば、何だこの茶ば……」

「やめろおおおーーー！ それ以上言つてやるな！ ヤムチャが不憫すぎるー！」

「茶番劇www」

「言つのかよ結局ー！」

ヤムチャにだつて頑張つてんだよ。ｗｗとか使うんじゃねーよ。  
可哀想に……。

「で、結局ドラゴンボール最強は誰なんだ？」

意外と氣になつてる自分が悔しいが。

「理論上、単体で最強になれるのは天津飯だね」

「…………天津飯？ 天津飯つて、終期のドラゴンボールでの戦闘力インフレにリタイアした、脇役じやねえの？」

「いやいや、天津飯は終期でも活躍してるよ。魔神ブウ戦で悟飯とデンデを間一髪で救出してるし」

…………いよいよ、読者のドラゴンボール知識を無視して進行してんな、この小説。

「うーん、まあ、天津飯の凄さは解つたが、にしたつてアイツが最強ってのはオカシくないか？」

「第二十一回天下一武道会で、孫悟空に対しても使つた技『四身の拳』を覚えてる？ 四人に分身するやつ」

「あつたな、そんなの。力とかスピードも四分の一になっちゃって、結局やられちゃつた技だろ」

「そう。その四身の拳とフュージョンとポタラを使えば最強になれない？ まず四人になって、フュージョンで一人に戻る。フュージョンは元の一人の力の合計以上にパワーアップする融合だから、この時点では天津飯の戦闘力は上がる。で、その動作をフュージョンの制限時間の三十分ギリギリまで繰り返す。そして最後に融合が解除されないようポタラによる合体をすれば最強天津飯の出来上がり！」

！」

早奈美はもはやどうでもいいような説明を嬉々とした表情で終えた。

「まあ、その理論が矛盾してるかどうかは知らんが、あんまり現実的な話じゃないと思うぜ」

「…………何で？」

「だってさ、フュージョンってちょっとミスるだけで成立しないじ

やん。三十分もミス無しでフュージョンをし続けるのは相当のプレッシャーだよな。それに、ポタラが分身した天津飯を同一人物とみなしたら、融合しない可能性もある気がするんだけど

「…………死ね」

「てめえは情緒不安定か！」

「都合が悪くなるとすぐこれだよ！ 一いつ、よく今まで何のトラブルもなく生活できたよな。

「いや、治樹ツチ。トラブルは多々あったよ。お隣の暴力団が小指を要求してきた時はビビったよ」

「どんなシチュエーションだよ。つーかお前んちの隣暴力団なの！」

？

「なあに、小規模な暴力団だよ。一、三百人位じゃない？ 古代スバルタと比べりや兵力がまるで足りないよ」

「お前の中で古代スバルタは何の基準なんだか言つてみる」

「古代スバルタへのこだわりはどこから来てるんだ？」

「そんなどうでもいい話はともかく、情報を聞いた以上、放課娯楽部に入会してもらつよ」

僕は、そういえばそんな話してたなあ、と思い出した。

「……まあいいよ、別に。放課後に暇つぶしするだけだろ。もはや俱楽部と言えるか知らんが……」

所詮自称だから文句は言わないけれど、内容が乏しいよな、その俱楽部。

「簡単に考えてもらつちや困るなあ、治樹ツチ。将来的には我が高校の正式な部活に昇格させるのよ」

「J2からJ1に昇格するみたいに言つてつけど、絶対無理だぞ。そもそも何だよ『放課後俱楽部』って、まんま過ぎるだろ」

「違う違う、ふざけないで！ 『放課後俱楽部』じゃなくて『放課娯楽部』だよ。『後』じゃなくて『娯』！」

あれ？ いやいや、前から気になつてたけれど、早奈美の誤用じやなかつたのか。確かに放課後を放課娯と間違えるつてのは無理が

あるか。

「なんか意味あんの？」

「放課後と娯楽と俱楽部をかけてんのー。ほら、娯楽の『娯』が俱樂部の『樂』に繋がるのさ」

早奈美はどや顔でこっちを見てくる。感想を求めているらしい。いや、感想つつもなあ……。

「下りねー」

「ん？ もう一回いつてみな。返答しだいでは、エターナルフォースブリザードをぶち込むわよ」

「エターナルフォースブリザードって何！？」

「一瞬で相手の周囲の大気」と氷結させる最強の技。相手は死ぬ

「…………ああ…………イタすぎぬ…………！　どこの厨二病だよ！」

まあ、後ほどインターネットで律儀に『エターナルフォースブリザード』でググってみたら、2ちゃんねる由来のワードだと判ったので幾らか安心したが、この時の僕は真剣に彼女の将来を心配した。「あたし思うんだけど、単に『エターナルフォースブリザード！』って叫んでも、厨二臭さが足りないと思うのよ

「足りてるわ！　これ以上恥ずかしい真似はするな！」

「ていうか、厨二っぽいって知つて言つたのかよ。

「枕詞つていうか、詠唱つていうか、もつとこいつ、魔法つぽくせ…

…

「無視して続けるなよ、いらねーよ詠唱とかー」

「冥界の扉よ、我が願と魂に応じ、凍てつく吹雪の剣と全てを切り裂く鬼神の氷牙を与えよ。血は氷華、魂は刃。吹き荒れよ！　エタ

ナルフォースブ…

「ああああああ…………やめろ…………やめてくれ…………イタすぎて聞いてらんねえ！　そしてまず、その高らかに掲げた両腕を下ろしてくれ！」

僕は早奈美が魔法を唱え終わる前に彼女の両腕を自分の両腕で掴み、必死に下ろそうとした。

抵抗する早奈美。抵抗するといつことは、魔法発動には両腕を高く上げる必要があるようだ……って、何の話だよコレ！

しばらく、魔法発動を巡る攻防戦（ハイファンタジーみたいな響きだが、ただの取つ組み合いである）が続くと、不意にガラガラと音を立て教室のドアが開けられた。

「…………嵐山さんに西山君？ 何やつてるの…………？」

まさかの委員長登場である。

紹介しよう。彼女はクラス委員長、白崎奈緒しらさきなな。僕の小学校からの同級生だが、これがまた生真面目なやつで。

男女で取つ組み合いをしている僕らを見て訝しんでくる。

「いや……何やつてるのって聞かれると…………」

取つ組み合いと答えるも、何というか、異性同士が取つ組み合いできるのも僕と早奈美だからであつて、なんか嘘っぽいっていうか、良からぬ誤解が生まれそうな気が…………。

かといって魔法の発動を阻止してますなんていう[冗談]がこの委員長さんに通用するのかどうか…………。

そして、僕が返答に困つてると、早奈美が衝撃の一言。

「委員長ちゃん！ あたし、コイツに痴漢行為を…………！」

「待て待て！ 何で僕がお前に…………」

とんだ言いがかりだ！ 冗談の通じない人に何てことを言いやがる！ とはいえ奈緒だつてこの女が変人だつてことは知つてるわけだし、まさか信じないよな…………。

「西山君！ 嵐山さんから離れなさい！ ついにそんなことをやつてしまつたのね！」

信じてんじゃねーよ委員長！！ つか、「ついに」って！ 僕が痴漢をすると思つてたのかこの人！ それでも僕はやつてない！ 「いくら小学校からの付き合いがあつても、我が英高校の気風を乱す行為は許しません！」

英高校つてのは、僕らの通う高校の名前である。昔から奈緒は自分に対する愛情が強い。

そんな奈緒は、とんでもない誤解をしたまま鬼の形相で僕に近づいてきた。

「誤解だつて！ 僕が早奈美にそんな変態行為する理由あるかよ！」「ベッドの下にあんなものを隠している西山君は信用できないです！」

「何でお前が知ってる！ オカシいだろ！」

僕んちのセキュリティー大丈夫かよ！？

「西山君が正義の道を踏み外さない為の不法進入なんだからね。 私に心配かけさせないでよ」

「田を覚えせ！ お前の正義は正義じゃない！」

「この時の僕はまだ気付いていなかつた。

」の、奈緒との数秒の会話の後に早奈美が放つ一言がこの喜劇をバッドエンドに導くとは。

「メディアにバッドエンドなんてあるのかつて感じだが。

そしてついに、その時がやつて來た。

「委員長ちゃん！ ナイス時間稼ぎ！」

ヤな予感しかしないのは僕だけではないだろう。

「食らえ治樹ツチ！ エターナルフォースブリザード！……」

「…………」

放課後の教室の空気は、奇しくも彼女の望んだ通り氷結したのだった。

## (後書き)

なんかスイマセン（笑）

私はいつも難しいテーマを扱つてる作者で、真面目作品が多いのですが、その息抜きでコメティを書いたので、自由になりました。しかも、元ネタを知らないとクスリともこないコメティーですよね。まあ、非公開の予定でしたから当然かもしだせんけれど。ドラゴンボールに関しては、一回読んだくらいではついて来れないくらい細かい話をしている気がします。

エターナルフォースブリザードは、検索してみてください（笑）古いネタですけれども・・・。

委員長白崎奈緒に関しては登場の仕方がちょっと突然すぎた気もありますが、この「メティ」はストレス解消に都合が良いので、続編も作る気がします。

なので、そこで白崎さんにはそこで改めて登場してもらいましょう。まあ公開するかはわかりませんが（笑）

ときには、古代スバルタって本当に王が一人いたんですかね？

私の雑学知識によればそつだつたと思いますが、実のところちゃん

と調べてないんですよね。

ともあれ、こんな私の趣味でしかない拙作にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

そしてスミマセン！

追記

『放課後CLUB』といつ続編を書きましたもしよかつたら読みに来て下さいw

<http://ncode.syosetu.com/n2208>

v /

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7439p/>

---

放課娛俱樂部

2011年8月16日03時10分発行